

# 大学史編纂課だより

第8号

2015年3月10日 発行

目次

学祖・創業者関係

- ◇学祖の文化的交流について…………… 2
- ◇創業者野田（長森）藤吉郎の調査…………… 4

連載

- ◇終戦と学徒 前編…………… 6



松岡康毅と曾孫の三島昌子氏（三島昌子氏所蔵）

### 葉山別荘での晩年の松岡康毅

この2枚の写真は、大正10年（1921）夏に葉山の別荘で、曾孫の三島昌子氏を抱いた松岡康毅（第2代校長・初代総長）です。松岡の孫娘純氏は、ボーイスカウトの育成で有名な三島通陽（三島通庸の孫）に嫁ぎました。純氏自身もガールスカウトの発展に尽くしています。三島昌子氏はその令嬢にあたります。

写真から謹厳といわれた松岡の肉親への愛情が感じられます。葉山別荘で撮影された松岡の写真は珍しく、当課では所蔵していない貴重なものです。データについては、元日本大学山形高等学校教頭小形利彦氏から提供していただきました。

不幸にして、2年後の大正12年9月に起こった関東大震災により、松岡はこの別荘で罹災し亡くなりました。



松岡右隣、孫娘の三島純氏（三島昌子氏所蔵）

## 学祖の文化的交流について—新資料の入手—

大学史編纂課では、本年度、あらたに学祖資料が収められた卷子3点を入手しました。この卷子には「桂林一枝」「温和卷」「名賢墨帖」と外題が記されており、その外題はすべて児玉少介が記しています。本誌第5号でも紹介しましたが、児玉は長州藩出身で明治以後は内務省や工部省に勤務し、漢詩に秀でた人物でした。この3点の卷子には明治期に活躍した人物の書が多数収録されており、学祖山田顕義の書4点も収録されています。

紹介する3点の卷子は、外題を児玉少介が書いていることから、所蔵していた書を児玉が卷子状に表装し

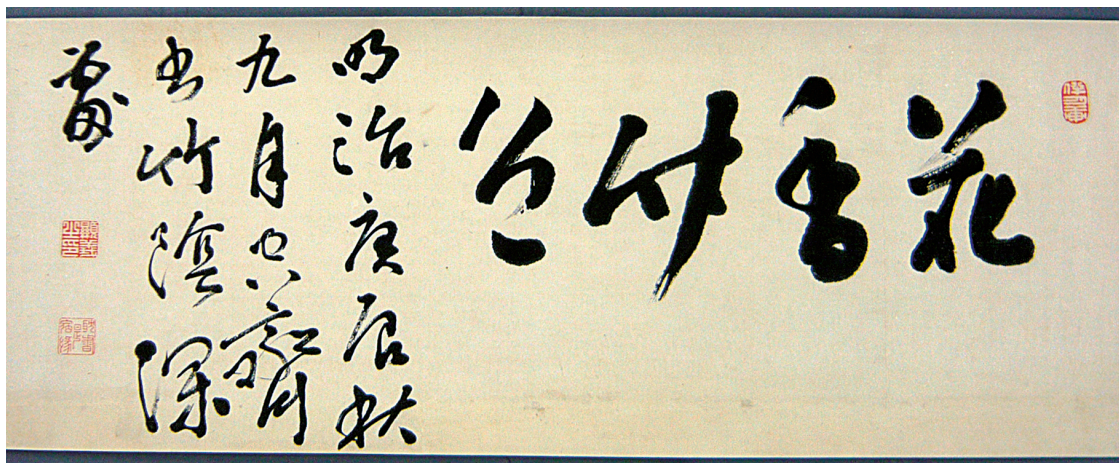


顕義の書が収められている卷子

たものと考えられます。児玉は、天保7（1836）年生まれなので、学祖山田顕義より8歳年長です。幕末期には、京都で長州藩世子に随って岩清水行幸に供奉し、下関での四方国艦隊との戦争にも参加しました。明治以後は京都府、奈良県に出仕し、その後、内務省、工部省で勤務します。明治23年に元老院議官、明治29年に貴族院議員に勅選されました。児玉は当時一流の漢詩人とも交流のあった文化人で、その中に山田顕義も含まれていました。

「桂林一枝」「温和卷」と題した卷子は、2つで1つの箱に収められており、この2点には著名人の一行書が15点収録されています。学祖筆の書は、「与人交外淡中堅」「高山流水知音」「花香竹色」の3点があり、「高山流水知音」には、「村上詞契」と為書きがあります。これは、村上氏の為に記したといういわば覚え書です。この「村上」とは、萩藩支藩の清末藩出身である村上倫<sup>りん</sup>であると考えられます。当課が保管している児玉旧蔵の卷子にも、村上倫宛の書簡が含まれていましたので、児玉と村上は親戚関係か近い間柄であったと考えられます（詳しくは『巒誌』第9号、「山田顕義書簡（村上倫・児玉少介宛）」を参照）。

その他の人物としては、有栖川宮熾仁親王<sup>たるひと</sup>、三条実美<sup>さねとみ</sup>、頼山陽<sup>らいさんよう</sup>、杉孫七郎の書などの書が収録されています。頼山陽の書は「文化庚午」（1817年）とあるの



顕義の一行書「花香竹色」（明治13年9月）

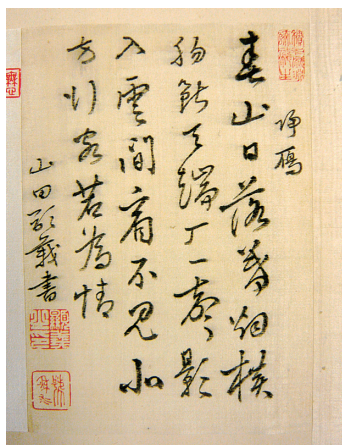


有栖川宮熾仁親王「信為萬事本」(信を萬事の本と為す)

で、江戸期に記されたものですが、その他の書は明治10年代に作成されたものがほとんどです。

一方、「名賢墨帖」には、様々な人物が記した漢詩21点が収められており、山田顕義筆の資料としては、「<sup>きがん</sup>帰鴈」と題した七言詩が収録されています。また、「<sup>もとすけ</sup>長州の三筆」といわれる<sup>ちようさんしゅう</sup>野村素介、長三州、杉孫七郎の漢詩も収録されています。彼らと山田顕義、児玉少介は漢詩や書などの文化的交流が盛んだったようですが、そのことが本資料を見ても明らかです。

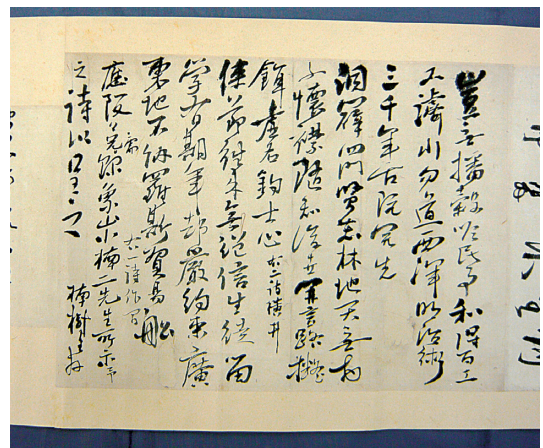
この「名賢墨帖」は前の2点と比較すると、江戸期に作成されたと考えられる書が多く収録されています。その中でもとくに注目したいのが「楠樹」と記された資料です。「楠樹」とは高杉晋作が使用していた号で、この資料には、<sup>しやうなん</sup>阪本兄の求めに応じて佐久間象山、横井小楠二先生の詩を呈すと記されています。



顕義の七言詩「帰鴈」

「阪本」とは、前に紹介した村上倫のことで、江戸期には阪本恕八郎と名乗っていました。幕末に当時の著名な学者である佐久間象山と横井小楠の漢詩を高杉晋作が友人に伝えているという興味深い資料です。

政治や軍事の事象については、公文書も数多く残されるので、比較的



高杉晋作が友に贈った漢詩

当時を辿ることが可能ですが、文化的交流という側面は、なかなか辿るのが容易ではありません。その意味では、山田顕義と交流があった児玉少介が旧蔵していた巻子を分析することにより、山田顕義の文化的交流がより具体化されることに繋がるかもしれません。

さらには、長州藩の先輩である児玉少介には、顕義は政治上の問題も相談していることが書簡で確認できています。つまり、文化的結びつきは、政治的なつながりにも通じている可能性があります。日記などがあまり残されていない山田顕義の足跡を辿るには、文化的交流という面から、軍事・政治などの他の事象との関連を導き出していくことも必要となります。今後、さらにこの資料を分析し、学祖山田顕義の文化的側面に光をあてることができると考えています。

(松原)

## 創立者野田（長森）藤吉郎の調査

日本法律学校創立者の一人に長森藤吉郎（旧姓野田。長森敬斐の養子となる）がいます。

明治13年（1880）司法省法学校第3期生として入学、21年帝国大学法科大学を卒業し、司法省検事試補となります。翌22年（1889）の日本法律学校設立にあたっては、宮崎道三郎・樋山資之とともに幹事となって設立計画を推進し、開校後は法学・民法の講義を担当しています。

明治23年、東京始審裁判所詰検事となり貴族院書記官を兼務。その後東京地方裁判所検事、高知・大津地方裁判所検事正を経て、31年司法大臣秘書官に任じ、また東京地方裁判所検事正に転任するなど司法官としてのキャリアを重ねていきますが、山田顕義急逝後の日本法律学校廃校危機に際しては本多康直とともに活動し、松岡康毅への校長就任の交渉は清浦奎吾と長森が努めたといえます。松岡の校長就任を機に、宮崎・樋山とともに長森は幹事を止めていますが、その後も維持員として日本法律学校の財団法人認可申請や、日本大学基金募集委員会委員としても関わりました。34年には桂太郎内閣の大蔵官房長に任じられましたが、2年ほどで辞職して実業界に入り、東洋硝子製造会社専務取締役、満韓塩業会社取締役就任しています。

このように、長森は実業家としての一面もありましたが、長きに渡って本学の発展に少なからぬ貢献をした人物であることが分かります。しかし、それらの活動を裏付ける資料がなかなか発見できません。

野田素平の二男として佐賀県に生まれた藤吉郎は、23年、長森敬斐の長女と結婚、婿養子となり、35年に家督を継いでいます。長森敬斐が山田顕義司法大臣のもとで法典編纂に尽力していたため、山田は藤吉郎に目を掛けていたといえます。

藤吉郎の養父長森敬斐は佐賀県士族で、明治5年（1872）、江藤新平が司法卿に就くと、薦められ左院に五等議官として出仕し、浅井晴文・津田信弘等と正七位に叙され、法律起草にあたります。以来、太政官権大書記官・法制局参事官・法律取調報告委員を歴任するなど法典の編纂に尽力し、明治24年に退職。明治35年（1902）6月に69歳で没し、特旨を以て正五位を贈られています。

編纂課では佐賀県で長森藤吉郎の再調査を行ないましたが、残念ながら資料などは発見できませんでした。長森の手元に書類・書簡（＝文書）があったと考えてもおかしくはないし、それらを長森家が引き継いで保管していないか、地元佐賀市など縁の地に寄贈などされていないかと調査を続けましたが、藤吉郎（旧姓野田も含め）はおろか養父長森敬斐についてもまったく情報が出てきませんでした。

写真は、東京青山霊園内にある高さ3m以上もある顕彰碑で「正五位勲五等長森敬斐君墓」と大刻字されています。長森の養父元法制局参事官長森敬斐の顕彰碑で、裏面の碑文は、同郷の久米邦武一岩倉使節団に随行、『特命



全権大使米欧回覧実記』の編著者一が撰しています。そして、正面長森敬斐碑の向かって左が夫人秀子の碑で、裏面に孫の貞夫氏が祖母を偲んで墓誌を記しています。敬斐碑の右がその一子小太郎の墓碑ですが、小太郎は明治22年に病死しています（ゆえに、野田藤吉郎が敬斐の養子となったのです）。左手前が「長森家之墓」碑で、裏面に藤吉郎の長男貞夫氏が昭和31年に建立したと刻字されており、側面に、藤吉郎は大正9年6月29日、59歳で没したと刻まれています。

つまり、この写真に写っている一画が長森家の墓所ということになり、長森家は東京に移り住んでいたようです。

上述のように藤吉郎の長男貞夫氏は、東京帝国大学卒業後、文官高等試験に合格。農商務事務官、農林事務官、山林局林政課長などを歴任し、後に東京競馬倶楽部常務理事、日本競馬会理事に就任しました。日本中央競馬会（JRA）の前身機関設立に尽力された人物かとJRAにも調査に行きましたが、情報はありませんでした。

青山霊園の管理所によると、この墓所は東京都に返還されているということです。何時・誰が…かは、知りえません。

長森家は藤吉郎の代は渋谷に、貞夫氏になって吉祥寺（武蔵野市）に移転したであろうことが確認できますが戦前まで、戦後についてはわかりません。現状では、この写真が長森家のすべてを語っているのです。

（田淵）

【参考】「日本人名大事典」・「明治人名辞典」Ⅲ下巻。「明治人名辞典」下巻（現代人名辞典）。「人事興信録」（明治36・41・44、昭和12・14・16・18・23年）。

## 出征学徒数調査を開始

大学史編纂課では、刊行物などから日本大学出身学徒の陸海軍への入隊者数の調査を続け、そのつど『大学史論集 叢誌』で発表しています。しかし、詳細な記録が残っているのは海軍士官となった者たちがほとんどで、その他の実態はあまり把握できていません。

そこで、終戦70周年を前に平成26年7月から、学内文書からの出征学徒数調査を開始しました。対象としているのは、「日中戦争」が開始された昭和12（1937）年度から、終戦の20（1945）年度までの在 student で、主に学籍簿と授業料台帳に記載されている「入営」「応召」といった記録から集計しています。

1月末の時点で、文理学部・経済学部・芸術学部の調査を終え、文理学部の集計が終了しました。芸術学部は終戦翌年の昭和21年の火災により、それ以前の文書類はほとんど焼失しており、出征に関する記載がある文書はコピーが残っている2冊のみでした。

文理学部で出征が明らかとなったのは、再召集者を含めた延べ人数で、法文学部文学科360名・予科106名・専門部（宗教科・社会科・文科）196名・高等師範部324名の計986名です。

（高橋）



経済学部の学籍簿

## 終戦と学徒 前編

本年8月15日で終戦70周年を迎えます。そこで、終戦前後の時期に焦点を当てて、前編では勤労働員、後編では出征した学徒兵に関するエピソードを紹介します。

昭和19（1944）年から本格化した軍需工場への動員は、大学の所在地周辺ばかりではありませんでした。規模の大きな工場には各地から労働力が集められ、その一つに、機銃や機銃弾を製造していた、豊川海軍工廠（愛知県豊川市）がありました。

昭和14年に開庁した豊川海軍工廠は、最盛期には50,000人以上もの人々が働いており、その内には、6,000人もの動員学徒が含まれていました（桜ヶ丘ミュージアム『終戦60周年企画 豊川海軍工廠展 巨大兵器工場－終戦60年後の記録』）。

日本大学からも昭和19年9月に、世田谷（現 文理学部校地）の予科文科の1・2年生が動員されました。昭和20年春頃には、高等教育機関－大学・高等学校・専門学校9校、中等教育機関－中学校・高等女学校・実業学校－34校、国民学校－29校（19校は19年度末まで）からの学徒が働いていました。



豊川海軍工廠戦没者供養塔（全景）

昭和20年8月7日、豊川は124機のB-29による空襲を受けます。3,256発もの500ポンド爆弾が投下され、大きな被害を受けました。昭和21年9月23日に建立された「豊川海軍工廠戦没者供養塔」の台座に刻まれている戦没者数は2,544名ですが、この数は工廠に勤務していた軍人・軍属が対象であり、周辺地域の住民などを含めれば2,800名以上とされています。勤労働員されていた学徒からも多数の犠牲者があり、男子193名、女子259名、計452名が犠牲になりました。終戦の8日前のことでした。

日本大学予科生徒では、機銃弾を製造する火工部に属していた、服部八郎・中島建・神宮司貴・山崎宮次郎・長島昭二郎・宮坂義文の6名が犠牲となり、供養塔に名が刻まれています。この内、神宮寺・山崎・長島・宮坂は学籍簿で確認でき、昭和21年3月末日に特別修了証が出されています。ただし、宮坂義文が死亡したのは翌21年4月20日と記載されています。

また、長島・宮坂は当時1年生で、入学と同時に動員され、大学での生徒生活を送ることなく死亡したと推測されます（島方洗一「日本大学における戦時学徒勤労働員に関する一考察－豊川海軍工廠勤労働員学徒を例に一」『大学史論集 巽誌』第7号）。



台座に刻まれた戦没者氏名

（高橋）

## 全国大学史資料協議会2014年度総会（大阪）ならびに全国研究会



平成26年10月8日～10日、全国大学史資料協議会の総会が桃山学院昭和町キャンパス、全国研究会が大阪大学豊中キャンパスで開催されました。

本年度の全国研究会のテーマは、「学内業務文書の管理と活用」でした。学内業務文書をどのように管理し活用するかは、多くの大学が頭を悩ます大きな問題です。その対応も大学によりさまざまで、国・公立と私立では違いが見られます。研究会は、設置母体の違いを超え具体的な事例に基づいて、議論することが目的でした。

報告は、村上淳子氏（広島大学文書館）の「広島大学文書館における文書管理業務」、西口忠氏（桃山学院史料室）の「学内業務文書の活用を考える」、桑尾光太郎氏（学習院アーカイブズ）の「学内業務文書をどのように把握・整理するか—学習院における試み—」で、これらの報告を基に、学内業務文書の移管・整理の取り組み方、利用・活用の可能性等について討論が行われました。

文書管理のシステム化は容易なことではありません。各大学が悪戦苦闘しながら、学内業務文書に取り組んでおり、その過程で生じた問題点や課題が報告され、得るところが大きい研究会でした。

## 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国（福岡）大会及び研修会

第40回全史料協大会は、平成26年11月13日～14日、九州大学箱崎キャンパスで開催されました。13日の研修会は①「アーカイブズ入門」②「地域史料・古文書の取り扱いについて」③「市町合併文書の整理・保存～天草アーカイブズの事例～」④「防災対策と民間資料の所在調査」の4講座2選択のうち、筆者は②・③に参加しました。②は福岡県から指定管理者として指定を受けた柳川市が管理運営する柳川古文書館の報告、③は平成18年に2市8町が合併して誕生した天草市で、旧市町時代の膨大な資料を管理・保存している天草アーカイブズからの報告でした。財政難の中それぞれ工夫を凝らし、より多くの人々に利用してもらうべく活動する様子が具体的に報告されました。

翌14日の全体会は、大会テーマが「アーカイブズ資料の広範な公開を目指して」。公文書管理法施行にともない、各地自治体で歴史的公文書等の保存管理に関する法的整備が進み始めており、あまり馴染みのない公文書や古文書を人々への確に、より利用しやすい形で届けるための方法や問題点について、地元福岡共同公文書館・九州大学大学文書館・全史料協調査委員会等からの報告が行われました。



（田淵）

皆様のご意見をお寄せください

## 刊行物に関するご意見・ご要望 大学史に関する問合せ先

日本大学広報部大学史編纂課 E-mail: nuhistory@nihon-u.ac.jp

TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592

## 活動報告

平成26年4月～9月

### ○調査研究

- 5月2日～3日 添田寿一生涯150年記念祭への参加及び添田寿一関係資料調査（福岡県遠賀郡遠賀町）  
5月29日 全国大学史資料協議会東日本部会総会（立教大学池袋キャンパス）  
6月13日 那須野が原博物館での学祖関係資料調査（栃木県那須塩原市）  
6月27日～28日 鯉沢スポーツミュージアム及び上條慎蔵関係資料調査  
（山梨県南巨摩郡富士川町及び長野県松本市）  
9月5日～7日 上條慎蔵関係資料調査及び上條家からの寄託資料の受け取り（長野県長野市及び松本市）

### ○展示・普及

- 4月19日～6月22日 山田顕義生涯170年特別展「山田顕義と近代日本」展  
（萩博物館／同館開催の展示に協力）  
7月28日 商学部オープンキャンパスでの大学史展示（商学部）

### ○講演等

- 4月5日 日本大学理工学部（同学部スポーツホール）  
4月10日 日本大学東北高等学校（磐梯熱海温泉「華の湯」）  
4月14日 日本大学豊山中学校（同校体育館）  
4月23日 日本大学鶴ヶ丘高等学校（同校体育館）  
4月25日 日本大学豊山高等学校（同校体育館）  
5月25日 山田顕義フォーラム（萩博物館）  
6月5日・12日 日本大学商学部（1501・1503・1601・1602教室）  
6月7日 史都萩を愛する会 第52回 例会（萩博物館）  
6月10日・17日 日本大学国際関係学部（山田顕義ホール）  
6月14日 日本大学三島高等学校・中学校（国際関係学部8号館講堂）  
8月23日 日本大学熊本県校友会（熊本ホテルキャッスル）  
9月20日 トークライブ「山田顕義と風折烏帽子」（岐阜市歴史博物館）

## 大学史編纂課だより

第8号

2015年3月10日 発行

編集・発行 日本大学広報部大学史編纂課  
〒359-0003 埼玉県所沢市中富南4-25  
TEL 04-2996-4555 FAX 04-2996-4592

印刷 株式会社 文成印刷

(2015.3.10 5000)